

私たちのことを本当に分かっているのは、私たちを造り、生かしてくださる神様です。

1. 必要をご覧になる（：30～34）

主イエス様は弟子たちの状態をよく見ておられました。30 節。2 人一組で遣わされて、活動した 12 人の使徒たちがイエス様のもとに戻って来て、自分たちの活動の様子を報告しました。遣わされた場所で、彼らはイエス様がなさったことと同じようなことをすることができました。「悔い改めるように宣べ伝え」ました。「悪霊を追い出し」ました。「病人を癒し」ました。ですから、戻って来た弟子たちは興奮して、自分たちの活動の様子を喜びに溢れて報告したでしょう。

でも、多くの人々が使徒たちのところに集まって来て、忙しく緊張した日々を過ごしたことでしょうから、彼らは疲れていたと思います。31 節。慰めに満ちたイエス様の計らいです。

私たちにとってもこのような休みは必要です。人々に喜ばれることであっても、主の御心にならぬことであっても、忙しく仕えているなら、肉体的に疲れますし、霊的にずれてしまうことがあると思います。神様に召され、遣わされ、神様の恵みと祝福を分け与えているのですが、それよりも自分の苦勞に思いが向いてしまいます。行いばかりに囚われてしまい、神様の御前にある自分を忘れてしまいます。ですから、そのような時には休みが必要です。ただ休むのではなくて、静まって主に向かい、主の恵みを思い起こすことが大事です。

32～33 節。弟子たちはため息が出るような思いだったでしょう。その時、イエス様はどうしたのでしょうか。

34 節。イエス様は集まって来た大勢の群衆をご覧になり、彼らの必要に思いを向けます。「彼らを深くあわれみ」とあります。その理由は、「彼らが羊飼いのいない羊の群れのようにであった」からです。羊飼いがいなければ、羊の群れは簡単にバラけたり、あらぬ方へ止めどなく進んでしまいます。獣に襲われたり、牧草を見つけることができずに、生きていけません。当時のガリラヤの人々の状態を想像してみると、苦しいものだったのでしょう。ユダヤ人でありながら、神の民として正しく導く指導者がいませんでした。ユダヤの人々からは見下され、宗教指導者たちからは多くの定めで締め付けられていました。ヘロデ・アンティパスという横暴な領主のもとで苦しい生活を強いられ、その背後にはローマ帝国の権威がありました。

そのような中で苦しんでいた群衆をイエス様は深くあわれんで、「多くのことを教え始められた」とあります。神様のみこころを示し、律法の本来の意図を説明し、神の民としてのあり方を指導したことでしょう。

主イエス様がなさったように、今も神様は人々の必要をご覧になって、深くあわれんでおられます。そして、みことばによって、一人ひとりの必要にふさわしく語ってくださいます。聖書のみことばによって、神様が私たちの心に語りかけてくださいます。不思議に、その時の自分に必要な教えや励ましや導きを与えられるのです。主の深いあわれみによることです。

2. 必要に応じてくださる（：35～44）

イエス様の対応は長時間に及んだようです。そうしているうちに夕方になりました。そこで弟子たちがイエス様に言いました。35～36 節。この時の群衆はどのくらいの数だったかと言うと、男が 5 千人でしたので（：44）、女性や子どもも入れたらそれ以上の大群衆です。その大勢の人々がこの寂しい所で夜を迎えたら、食事はどうするのですか。イエス様、もう皆を解散させてくださいと、弟子たちは言うのです。当然の判断です。

ところがイエス様は、ここでとんでもないことを言います。「あなたがたが、あの人たちに食べる物をあげなさい」。弟子たちは驚いて言います。「私たちが出かけて行って、二百デナリのパンを買い、彼らに食べさせるのですか」。1 デナリとは当時の 1 日分の労賃です。弟子たちは周囲を見渡して、ざっと計算したのでしょう。今で言えば 200 万円分の食べ物です。そんなお金もないし、どうやって調達するのですか。そんなこと無理ですという思いだったでしょう。

すると、イエス様は直接答えず、「パンはいくつありますか。行って見て来なさい」と言われます。弟子たちが確かめて、手にした食べ物はほんのわずかでした。「五つです。それに魚が二匹あります」と報告しました。こんな少しのもので何になりましょう、自分たちの判断が正しいです、と言わんばかりです。

弟子たちの判断は現実的でした。誰でも同じように考えるでしょう。しかし主イエス様は、同じ大勢の群衆をご覧になりながら、全く違いました。弟子たちは群衆の数の多さと手元にある物の少なさを見て、不可能だと思いました。しかし、主イエス様は群衆を深くあわれんでおられ、空腹のまま帰らせようとはなさいませんでした。それぞれの自己責任でと言って傍観者となるのではなく、主イエス様はそれぞれをあわれみ、その必要に応じてくださるのです。

イエス様はそれで十分と言わんばかりに弟子たちに命じます。39～40 節。ここで「座る」と訳されていることばは、他の箇所では「食卓に着く」と訳されています。つまりイエス様は、これから食事が始まるから、人々を座らせなさいと命じたのです。

41 節。ここでイエス様がしていることは、ユダヤ人のいつもの食事の時の行為です。家長がパンを取り、神をほめたたえ、裂いて、家族に与えます。強いて違いを挙げるなら、「天を見上げて」という点です。いつもの食事でも、神様が与えてくださったことを感謝して、祈りますが、ここでは「天を見上げて」祈りました。天の父なる神様が食べ物を与えてくださる、そしてこれから起こることは天の父なる神様の恵みによることであると示したのでしょうか。

そして、イエス様が裂いて、人々に配るように弟子たちにお与えになりました。すると不思議なことに、裂いても裂いても、パンと魚はなくなりません。弟子たちは驚きながらも、せっせと人々に配ったことでしょう。そして群集がみな満腹し、パン切れの残りを集めると 12 のかごにいっぱいになりました。

無理と思える状況にも、主イエス様は、深いあわれみをもって群衆を見て、そして天を見上げました。私たちも見るべきところを示されます。救いを必要としている人々に対する主の深いあわれみに信頼したい、人々の救いのために全能の父である神様はみわざを行ってくださることを覚えていたいと思います。自分や周囲を見て、無理だと決め付けるのではなく、天の神様を見上げたいと思います。

3. 牧者である主イエス

この出来事に示されている牧者である主イエス様について、みことばを心に留めたいと思います。イエス様は集まって来た群衆をご覧になり、「彼らが羊飼いのいない羊の群れのものであったので、…彼らを深くあわれみ、多くのことを教え、また食べ物を与えました。イエス様はご自身が彼ら、羊の群れの羊飼いであることを示されました。

イエス様はご自身のことを「良い牧者」であると言われました。ヨハネ 10 章 11 節。自分のいのちをかけて羊たちを守る羊飼いが良い牧者です。イエス様はまさに羊たちのためにご自分のいのちを捨てられました。罪のないイエス様が、私たちの罪を代わりに負って十字架で死なれたゆえに、私たちは罪を赦していただき、新しいいのちに生きることが出来ます。そして、良い牧者であるイエス様の羊の群れに加えられます。主イエス様のものとされて、主がいつも共にいてくださって、養ってくださいます。

牧者である主イエス様について、みことばをもう一箇所開きたいと思います。I ペテロ 2 章 25 節。私たちは羊飼いである主イエス様から離れているなら、羊のようにさまよっている状態です。帰るところを見失い、不安で、力を失っています。しかし、そのような私たちが救い主イエス様を信じるなら、「自分のたましいの牧者」である方のもとに帰ることができます。

主イエス様は牧者としてどのような恵みを与えてくださるのでしょうか。主は、99 匹の羊を置いて、迷い出た 1 匹の羊を捜し出してくださいます。私たち一人ひとりを大切に扱ってくださいます。

また主は、ご自身の羊を一つの群れとして集めてくださいます。私たちは孤立して信仰生活を送るのではありません。牧者のもとで、共に生きることができます。

また主は、羊たちを緑の牧場に導き、養ってくださいます。私たちの必要に応じてくださいます。みことばによって私たちのたましいを養ってくださいます。

主イエス様を信じ、従う人は、このようなたましいの牧者のもとに帰ることができるのです。

主イエス様は私たちのこともご覧になっています。それぞれの必要を分かって、取り計らってくださいます。私たちが自分の行いばかりに囚われている時に、静まって主に向かい、主の恵みを思い起こすようにと促してくださいます。

また、主はみことばによって、私たちそれぞれの必要にふさわしく語ってくださいます。深いあわれみによって、私たちに教え、励まし、導いてくださいます。何よりも、いのちを与え、養ってくださる主ご自身の恵みを知らせてくださり、味わってくださいます。

救い主イエス様は十字架でいのちを捨てられました。その死によって信じる者たちにいのちを与えてくださいます。そして、信じる者たちが与えられたいのちに生きていけるように養ってくださいます。

救い主イエス様を信じましょう。信じて、従いますと決心しましょう。

無理と思う状況に置かれても、救いのみわざを行ってくださる全能の父である神様を信頼して、天を見上げましょう。自分にはできないと思うことにこそ、神様のみわざが明らかに現されます。